

『赤いろうそくと人魚①』

おがわみめい
小川未明

人魚は南の海にばかり棲んでいるわけではありません。北の海にも棲んでいたのです。

北方の海の色は、青うごぎいました。あるとき、岩の上に、女の人魚があがって、あたりの景色をながめながら休んでいました。

雲間からもれた月の光が淋しく波の上を照らしていました。どちらを見ても限らない、ものすごい波が、うねうねと動いているのであります。

なんという、淋しい景色だろうと、人魚は思いました。自分たちは、人間とあまり姿は変わっていない。魚や、また底深い海の中に棲んでいる、気の荒い、いろいろな獣物などくらべたら、どれほど人間のほうに、心も姿も似ているかshれない。それなのに、自分たちは、やはり魚や、獣物などといったしよに、冷たい、暗い、気の滅入りそうな海の中に暮らさなければならぬというのは、どうしたことだろうと思いました。

長い年月の間、話をする相手もなく、いつも明るい海の面をあごがれて、暮らしてきたことを思い出すと、人魚はたまらなかつたのであります。そして、月の明るく照らす晩に、海の面に浮かんで、岩の上に休んで、いろいろな空想にふけるのが常でありました。

1 回目
分 秒

2 回目
分 秒

3 回目
分 秒